

映画「望郷の鐘・満蒙開拓団の落日」を見て
～監督「山田火砂子」の思いを掘りよう～

(はじめに)

映画「望郷の鐘」は、中国残留孤児の父といわれた山本慈昭について、児童文学作家「和田 登」が書き上げた『望郷の鐘』を映画化（脚本和田 登、監督山田火砂子）したものである。

したがってこの映画の舞台は、山本慈昭が住職を務めた長岳寺のある阿智村（駒場）である。ここは、古くは東山道が通り、信濃（長野県）から神坂峠を越えて美濃（岐阜県）に通じる阿智（駒場）駅のあったところである。当時、東国から防人として召され西国に向かう途中、いよいよ険しい峠に差し掛かるとき、神の存在を意識して「神の御坂」に幣奉り、我が身の無事と、故郷に残した両親を想い「母父がため」と祈って旅だって行った歴史の舞台である。

ちはやふる かみのみさかに ぬさまつり いはふいのちは おもちちがため
知波夜布留 賀美乃美佐賀爾 怒佐麻都里 伊波負伊能知波 意毛知知我多米

一方映画「望郷の鐘」では、山本村、伍和村、会地村の三か村の村長が、「皇国日本のために」満洲に行ってくれと乞う場面や、山本慈昭が敗戦直前に「お国のため」と満洲に旅立って行った場面があり、それぞれの時代の中で「ときどきの人々が祈った」思いの歴史を感じるのである。

1) 映画監督 山田火砂子の制作への思い

この映画「望郷の鐘」満蒙開拓団の落日」製作に対する山田監督の思いを最初にまとめてみたい。山田監督は《平和が第一という信念で作りたい》との思いからメガホンを取る。「国家が総力を挙げて作り上げた大きな嘘は、いつの時代でも見破る事は容易ではない。そして、それに従った開拓団も義勇軍も客観的には侵略者であったという事実は打ち消せない。」という監督の言葉は、映画の冒頭で主人公山本慈昭の言葉となって次のように表れる。

国家の政策に純粋に協力しただけと言っても この事実は一人一人が責任を問われる事になる。
国家に尽くした日本国民は加害者であって 被害者であったのです。

このあと、『望郷の鐘』というタイトルが現れる趣向から見ても、この言葉に寄せる監督の思いの深さを読み取ることが出来る。

また、山田監督は次のようにも語る。

「満洲を知っていますか」と質問すれば、50 歳以下の日本人はほとんど「知らない」と答える。しかし、中国や韓国の人たちは知っている。全てを歴史として教えられているからだ。どうして日本では教えないのか。やはり歴史の 1 ページとして入れるべきではないかと思う。

さらに、「満州は楽しいところ」「日本（軍）は優勢だ」などと宣伝され、当時の国民はそれを信じ、騙されて満州へ渡った。私も 13 歳の時に東京空襲によって家を焼かれた経験があるが、満州で被害に遭った方々の苦労はそれ以上だったと思う。

戦争は何の得もない。絶対にしてはいけない。「何が起きても平和が第一」という信念の下にこの映画を作りたい。監督のこうした思いのこもったものであることを最初に述べておきたい。

2) 「望郷の鐘」から想起されるもの

映画「望郷の鐘」を見たとき、多くの方が山崎豊子の「大地の子」を思い出したのではないだろうか。映画「大地の子」では、日本人孤児「陸一心」は優秀な残留日本人として、最後は中国に生きることを決心する。その結果、残留孤児の永住帰国後の日本での生活は欠落しているが、中国に残ったが故の苦難に思いが及ぶ印象深い映画であった。

一方、映画「望郷の鐘」の山本慈昭は、シベリア抑留を経て戦後の日本に生きることになり、一生を残留孤児・婦人の帰国運動に身を捧げることになる。

これは、ようやく永住帰国がかなったいわゆる中国帰国者の方々(飯田下伊那地域だけでもおよそ 1300 人)の新たな苦難(言葉や生活習慣の問題など)の始まりでもある。映画「望郷の鐘」から「この新たな苦難」に思いを馳せてほしいのである。

映画の中で山本慈昭が、身を挺して国に孤児の帰国を要請する場面があり、この場面から私たちに「戦争の傷を今も背負う人たちと向きあっていく覚悟はあるか」と問いかけられていると見なければならぬ。今を生きる私たちは、帰国した人たちと向き合いながら、この地における戦争の歴史を学び、その歴史を次代に語り継いでいくことの大切さを学ばせて貰い、その中からかつての「侵略戦争」の反省に込めようとしているかを省みる機会としたい。それが山田火砂子監督の思いに近づき次世代に伝えていく具体的な問いかけである。そのことは5)のまとめでも記しておく。

3) 自治の精神を磨く

映画「望郷の鐘」公開に前後して一般社団法人「満蒙開拓平和記念館」では、ピースラボ主催の学習活動、冬期連続講座が開かれた。

その一つに「満蒙開拓から見る国と地方自治」(2月、講師 元阿智村長：岡庭一雄)の学習会があった。

岡庭氏は、映画の中で村長が「本日は皇国日本のためにまたこの地域の村のために…云々」とする「懇願書」持って満洲国民学校への赴任を慈昭に乞い願う場面に触れ、「住民(村民)を戦争に具体的に巻き込んでいくのは、地方機関(行政)がその第一線の役割を果たしていることを思い知る必要がある。」と話され、地方自治は最も住民の近いところで住民の意思によって住民参加の施策を行っていくのが本旨で、そのためには住民は「賢く」なくてはならないとしている。つまり私たちは、国の言うことから一歩置いた自治の精神を貫く気概を持つことを教えてくれた。この点でも映画「望郷の鐘」に学ぶことがあると指摘され、自分たち自身が知らないうちに戦争に巻き込まれない「賢い住民」を学ぶ大切さを識る機会となった。

4) 「夢美しく 望郷の鐘」を考える

同じく学習会で「戦争の記憶と歴史をつなぐ」(3月、講師 高校教員：小川幸司)があった。小川氏からは、学ぶことの本質を学習し、その中で「学ぶ」＝「賢くなる」＝「知識の貯え」とどまってしまうことが間々ある。「学ぶ」＝「分からないことが増える」＝「無限の問いかけが始まる入り口」としたい。」と話され「人間は考える葦である」の考え方に立って、歴史への「問いかけが大切と話された。

また、山本慈昭の「望郷の鐘」の詩(次ページ)に触れ、「思い出はかくも悲しきものか」で始まる詩の終わりの部分「夢美しく望郷の鐘」について、慈昭は日本に帰って来たが故に直面する苦闘の歴史を背負い「夢の中でのみ美しいものを現実の中でも美しいと言えるようなものに、できるか

どうかを私たちに問いかけているように思う。」と話された。

「大陸の土」となった人たちも、「大地の子」として中国大陸で生き続けることを決心した「陸一心」も、祖国日本に望郷の思いを果たした「帰国者たち」も、「夢美しく望郷の鐘」が鳴り響いて欲しいと願っているのである。

「夢美しく」とは「平和への希求」であり、この「夢美しく望郷の鐘」こそ「平和な社会実現への問いかけ」として、ひとり一人が向きあっていくための「警鐘」と考えたい。

思い出は かくも悲しきものか
祈りをこめて 精一杯つけ
大陸に命をかけた 同胞に
この鐘の音を送る 疾く瞑せよ
日中友好の手をつなぎ
共に誓って 悔を踏まじ
大陸に命をかけた 同胞に
夢美しく 望郷の鐘

日中友好手をつなぐ会長 山本慈昭

5) まとめ

最後に「何が起きても平和が第一という信念の下にこの映画を作りたい」とする監督の思いを、映画の鑑賞者である今の子どもや大人たちにどう知って貰うか、どう伝えていくかを考えたい。

阿智郷開拓団はほとんどの子どもや婦女子が犠牲になってしまった悲惨な結末がある。映画では、首を絞め殺すような残酷な場面を描くことはせず、子どもたちの目線で描くことを選び、子役の「義助」を生きて帰らせた。これは、「義助」を通して、今の子どもたちに「騙されない人間に育ってほしい」との思いを具体的に伝えたかったのではないかと思われる。映画後半で、慈昭と義助が再会し、「先生！ぼくたちは負ける戦争の最後に騙されて満洲に行ったんですね」の問いかけに、慈昭は「そうだ、騙されて行ったんだ、だから騙す者と騙される者が揃わなかったら戦争は起きなかった」と答える場面が挿入されている。これによって映画の一番最初の場面の「国家の政策に純粋に協力しただけと言ってもこの事実是一人一人が責任を問われる事になる」が再び思い起こされ、「愚かな戦争を再びしない子どもたちを育てたい」とする監督の一途な思いに強く共感することができるのである。

映画のフィナーレは慈昭が撞く「望郷の鐘」が鳴り響きその響きにのせて、私たちに戦争の記憶を語り継ぐ大切さが心にしみこんでくる。そんな映画「望郷の鐘」であったと記してまとめとしたい。(完)

上映までの経過（参考）

映画「望郷の鐘」（山田火砂子監督、現代ぷろだくしょん製作）は、2014 年 11 月、阿智村での試写会を皮切りに、飯田市内の映画館で一般公開された。さらに、下伊那郡下の各町村・学校等で上映され、多くの方々の鑑賞を得ることが出来た。

この映画製作に先立ち、映画製作支援ムードを盛り上げようと山田火砂子監督、岡庭一雄前阿智村長、木村多喜子ピースラボ代表ら 3 名によるトークセッションが 3 月阿智村で開催された。

5 月には映画「望郷の鐘」製作を支援する会（会長熊谷秀樹阿智村長）が発足した。飯田日中友好協会では、原作者「和田 登」先生を招いての講演会をはじめ、製作協力券販売や協賛金、スタッフ現地事務所の提供など、支援活動を行ってきた。こうして 7 月中旬からは山田火砂子監督が現地入りし、地元の方の皆さんの素晴らしい演技や動員などがあって順調に撮影・編集が進み 11 月初旬に完成となった。

以上